2009年 7月 28日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 国立精神・神経センター 精神保健 研究所 協力研究員

莊 島 幸 子 氏 名

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。					
会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 11 th European congress of psychology 第 11 回ヨーロッパ心理学会				
公式ホームページ URL	http://www.ecp2009.no/hjem.cfm				
開催期間	2009年7月7日 ~ 2009年7月10日				
旅行期間	2009年7月6日 ~ 2009年7月11日				
開 催 場 所 (国·都市·会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	開催場所(現地名)Oslo, Norway, 会場(3 箇所)Radisson SAS Plaza Hotel Oslo Congress Centre Clarion Hotel Royal Christiania 開催場所(日本語表記)オスロ・ノルウェイ ラディソン SAS プラザホテル オスロ コングレスセンター クラリオンホデルロイヤルクリスティアン				
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	発表者氏名:荘島 幸子(しょうじま・さちこ) 所属:国立精神・神経センター 精神保健研究所				
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	正式名:A Mother Retelling about Experience after Her child Coming-out of Desire to Live with Gender Identity Disorder 日本語訳:性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親の経験の語り直し				
補助金額	100,000円(内訳 航空券代として)				

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

【活動報告】

2009 年 7 月 7 日から 10 日にかけて、ノルウェーオスロ市において第 11 回ヨーロッパ心理学会が (The 11th European congress of psychology) 開催され、参加およびポスター発表を行った。発表 日時は、7 月 8 日の 13:15~16:00 であり、発表題目は、"A Mother Retelling about Experience after Her child Coming out of Desire to Live with Gender Identity Disorder" (日本語題目:性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親の経験の語り直し)であった。大会では、ヨーロッパを中心とした研究者たちの最前線の研究に触れ、国際的交流を深めた。

*なお、所属先に変更があったため申請時の所属と発表時の所属は異なっている。

【成果】

これまでテーマの限られた小規模な国際学会にしか参加したことがなかったため、今回のような 大規模な大会で多くの心理学者が集う場に参加、発表したことは初めての機会であった。しかも、 「ヨーロッパ」というのは、日本で心理学を専門とする研究者にとって、「アメリカ」ほど馴染みの ある場所ではない。また私自身、ノルウェーを含め、ヨーロッパに出向いたことすら初めてであり、 研究はもとより様々な文化の違いを知る経験となった。

大会では連日 400 人以上が発表するポスターのブースは、想像より狭い会場であった。発表持ち時間はおよそ 3 時間と長かったが、他の人の発表を聞くこともでき有意義な時間を過ごすことができた。私の発表は、セクシュアルマイノリティ(ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスセクシュアル)のトピックに組み込まれていたが、私も含めて 9 人の発表者しかいなかったが、どの発表も内容が濃く、人々が盛んに行き交い意見交換をしていた。昨年アメリカのワシントン市で開催された社会学系のナラティヴをテーマにした学会で知り合ったロシアの研究メンバーが、私の発表を聞きにきてくださり、思わぬ再会を果たしたこともとても嬉しかった。国際学会を通して名刺交換や意見交換をすることはあるが、その後も関係を続けることは案外難しい。自分で積極的に関係を継続していく意志と知的好奇心、そしてカジュアルな関係となることが重要なのだなと思った。また、中国や台湾などアジア系の人たちとも知り合いになった。彼らが日本のセクシュアルマイノリティの状況に強い興味を持っていることが分かった。

ところで、空いた時間に街歩きをしてみると、国立美術館に「ゲイキッズ」と書かれたレインボー色を下地とした大きな垂れ幕がかかっているのを発見した。よくみると、ゲイの人たちの子ども時台の写真が何百枚も折り重なるように展示されていた。地元の人たちも観光客も入り混じってその写真の前で微笑み、写真を撮っている風景をみて、日本の空気とは大分異なるものを感じた。しかしまた一方で、ヨーロッパ(特に北欧)ではアルコール依存や自殺の問題が重大な問題であることも見知ることができた。滞在中、お酒を飲むことは難しく、国が規制していることを知った。学会でも、連日、アルコール依存、うつ、自殺という言葉が強く主張され、コミュニティレベルでの活動を取り上げた研究もとても多く、ここでも日本との違いを感じさせられた。

【付記】

ヨーロッパ心理学会に参加する機会を与えてくださった日本心理学会、学会関係者のみなさま、 心より御礼申し上げます。私にとってノルウェーでの滞在経験は、今後の自分の研究に必ず反映さ せていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

2009年 7月 22日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 慶應義塾大学文学部・非常勤講師

氏 名 佐々木掌子



	•
会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	19th World Congress for Sexual Health (第 19 回性の健康世界会議)
公式ホームページ URL	http://www.sexo-goteborg-2009.com/
開催期間	2009年6月21日 ~ 2009年6月25日
旅行期間	2009年6月21日 ~ 2009年6月26日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Goteborg, Sweden, Göteborg Convention Centre (スウェーデン ヨーテボリ市、ヨーテボリ・コンベンションセンター)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	佐々木掌子(慶應義塾大学)
発表題目 ※正式名と日本語訳	STRESS COPING STYLES THAT RAISE GENDER IDENTITY AMONG THE TRANSGENDERED IN JAPAN(日本の性同一性障害当事者に おけるジェンダー・アイデンティティを高めるストレスコーピングスタイル)
補助金額	100000円(内訳:宿泊費および学会参加費)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

【概略】

性の健康世界会議は、隔年で開催され、"性に関する学術会議"として性の諸問題を広範に扱う非常に大規模な学会である。2年前より WHO の傘下に入ったため、性の健康を推し進めるための学術研究団体であるのと同時に、そのための提唱も兼ねた活動にも重きをおくようになっている。

性に関する諸問題をほぼすべて扱うほどの大規模な学会であるため、その内容は多岐に渡り、「女性性機能・男性性機能」、「出産・妊娠」、「中絶」、「生殖医療」、「セックスワーク・売買春」、「近親姦」、「性被害/性加害」、「女性外性器切除」、「外陰部形成術」、「STD、HIV/AIDS」、「パラフィリア」、「LGBT(ゲイ・レズビアン・バイセクシュアル・トランスジェンダー)、インターセックス」などがテーマとなる。こうした諸問題に対し、ホルモンなどの薬理研究や遺伝子など神経生物学的研究などは勿論のこと、カウンセリングや治療に関する効果や方法論の研究、また、学校やコミュニティをベースにした「性教育」のあり方(幼児から青年という発達的な視座だけでなく、障害を持つ人や宗教の違いなども考慮に入れ幅広く取り扱う)、さらには、national surveyに基づく公衆衛生の立場から「性の健康と権利/リプロダクティブヘルス・ライツ」の問題や性の諸問題についての社会学的考察やその歴史、そして、「性に関する法律」などもカバーしており、性の問題がいかに多様なテーマ、多様なアプローチにより研究されているのかを教えてくれる。

発表演題数は、ポスターだけでゆうに 1000 を超え、それに口頭発表、ポスター媒介口頭発表、及びシンポジウム、プレナリーセッション、教育講演、そしてワークショップが催される。5 日間、朝から晩まで性についてじっくりと学び、議論し、さらに研究を進ませるために、さまざまなバックグラウンドを持つ人々が参加できる場として機能している学会だといえる。

【報告者の発表】

発表内容は、わが国のトランスジェンダーのジェンダー・アイデンティティを高めるコーピングスタイルを検討するもので、医療機関を訪れた性同一性障害当事者 379 名を対象に質問紙法にて調査した分析結果をポスター発表した。

結果は、MTF(male to female: 男性から女性へ移行している人)と FTM(female to male: 女性から男性へ移行している人)とで一部異なる結果が得られ、「肯定的解釈」をすることは MTF、FTM ともにジェンダー・アイデンティティを高めるが、「カタルシス」は MTF のみ、「計画立案」は FTM のみに有意、ホルモン療法をしていない FTM の場合は、「カタルシス」は、ジェンダー・アイデンティティを低める効果があるなどの結果が得られた。

本研究で使用された尺度は、両尺度とも海外尺度の邦訳版ではなくわが国発の尺度であるため、 どのように測定をしたのかについての議論が活発になされた。なお、ポスターのA4縮小版を30部 用意していたが、即日無くなってしまい、もっと多く印刷すべきだったと反省した。

【その他、学会の様子】

プレナリーセッションの一つに New Sexological Research と題した、"Paraphilia and the DSM-V: general diagnostic issues and options exemplified with pedohebephilic disorder"、"New Traits in Genetic Sexlogy"、"Intersexuality and Transgender Research"という 3 つのセッションがあった。残念ながら、同性愛の遺伝子で Science 誌を騒がせた Hamer は当日欠席であったが、パラフィリア研究の大御所、トロント大学の心理学者 Blanchard とインターセックスとトランスジェンダーのフォローアップ研究で有名なコロンビア大学の心理学者 Meyer・Bahlburg は講演され、その膨大なエビデンスに基づいた豊かな考察に、筆者は多くを学び、研究のインピスレーションを受けた。

国際会議への助成をしていただき、たいへんありがとうございました。

2009年 6 月 24 日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院総合文化研究科 博士課程 氏 名 玉宮 義之

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	Association for Psychological Science 科学的心理学会			
公式ホームページ URL	http://www.psychologicalscience.org/			
開催期間	2009年 5月 22日 ~ 2009年 5月 25日			
旅行期間	2009年 5月 22日 ~ 2009年 5月 26日			
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	San Francisco, CA San Francisco Marriott サンフランシスコ・サンフランシスコ マリオット			
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記 発表題目 ※正式名と日本語訳	玉宮 義之 東京大学大学院総合文化研究科 The long term effects of violent video games on neural processes of recognition of emotional facial expressions 暴力的なテレビゲームが情動表情認知の神経処理に与える長期的影響			
補助金額	65,000円 (内 訳 航 空 券 ・ ホ テ ル 代)			

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

報告者は、2009 年 5 月 22 日から 25 日に San Francisco で開催された 21st Annual convention of Association for Psychological Science においてポスター発表" *The long term effects of violent video games on neural processes of recognition of emotional facial expressions*"を行った。多くの研究者が報告者の研究に興味を示し、様々な議論を行った。議論を通じて新たな視点・問題点が浮かび上がり、非常に有意義な発表を行うことができた。

本会議におけるポスター発表件数は非常に多く、また北米だけでなく世界中から研究者が集まっていることも印象的であった。子連れや障害を持った研究者も散見され、日米の学会におけるバリアフリーの相違も印象的であった。ポスターセッションを回ることで、心理学における世界の流れ、各地域・社会における研究結果を一度に把握することができ、非常に有意義であった。Keynote address や special event において、日本ではなかなか聞くことが難しい著名な研究者の講演を聞くことができ、今後の研究に多いに役立つ示唆を得ることができた。

研究テーマを共有する研究者と情報交換をすることは、研究における重要な要因の一つである。会議全体を通じて、様々な研究者とネットワークを構築することができたことも大きな成果の一つであった。

国際会議に参加し海外の研究者と交流することは、特に大学院生や若手研究者にとって貴重な経験となり、研究に対するモチベーションの向上にも繋がると考えられる。学会として若手研究者による国際会議への参加・発表を奨励し、経済的に支援することは非常に意義深いと感じられた。

2009 年 8 月 7 日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 立命館大学大学院 文学研究科 心理学専修 博士課程後期課程 氏 名 滑田 明暢

·					
会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 11 th European Congress of Psychology (第 11 回ヨーロッパ心理学会議)				
公式ホームページ URL	http://www.ecp2009.no/				
開催期間	2009年 7月 7日 ~ 2009年 7月 10日				
旅行期間	2009年 7月 6日 ~ 2009年 7月 13日※申請期間より一日長い				
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Country: <u>Norway</u> / City: <u>Oslo</u> / Venues: Oslo Congress Centre, Radisson SAS Plaza Hotel, Clarion Hotel Royal Christiania (国: <u>ノルウェー</u> 、都市: <u>オスロ</u> 、会場: オスロ会議場、ラディソン・サス・ プラザホテル、クラリオンホテル・ロイヤルクリスチャニア)				
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	滑田明暢(Nameda, Akinobu) 立命館大学大学院 文学研究科(Ritsumeikan University)				
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Perception of fairness in gender division of family work: Focusing on the procedure and ideology (家族内役割分担に関わる公正:手続き評価と役割観に着目して)				
補助金額	申請金額 176,590 円(補助金額は 100,000 円) 実額:161,906 円(※申請金額と実額の差は帰国日を一日遅らせて航空券費を下げたことによる)				

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

2009 年 7月 7日から 10 日の期間に開催されていた、第 11 回ヨーロッパ心理学会議(The 11th European Congress of Psychology)での私の活動とその成果を報告する。今回の会議には、開催国であるノルウェーをはじめとして、ヨーロッパにて研究活動を行っている人々が多く参加していた。また、ヨーロッパからの参加者と比べると少数であったが、私のようにヨーロッパ圏外で研究活動を行っている研究者も参加していた。そのため、昨年度ドイツにて行われた心理学国際会議(International Congress of Psychology)より規模は小さいものの、国際色の豊かな大会に感じた。私の個人的な感想としては、Philip Zimbardo 教授と Paul Costa 教授による、会場も巻き込みユーモアを交えながら行なわれたディスカッションの企画が印象的であった。会議のテーマに合致する形で、このディスカッションでは、急速に変化している時代でどのように心理学が社会の中で機能できるか、について議論が行われた。

活動

今回の会議では、口頭発表を行うとともに、講演、シンポジウム、ポスターセッションに参加し、私の研究活動に関わる知識や経験を蓄積した。口頭発表の題目は Perception of fairness in gender division of family work: Focusing on the procedure and ideology(家族内役割分担に関わる公正:手続き評価と役割観に着目して)であった。

活動から得られた成果

はじめに、口頭発表を行ったことによって得られた成果を報告する。今回の発表時には、「性別分業の形の分担にお互いが満足しているケースについてどう思いますか?」等、仕事と家事の分担の現状に関わる一般的な質問を受けた。私の研究が扱っている心的現象は公正(fairness)概念であるが、現在のところは社会問題を扱う研究の色が強いことを再自覚した。今後は、家族、ジェンダーの領域についてもより深く勉強し、質問に対してより幅の広い返答ができるよう努力したい。

次に、講演に参加して学んだことを一つ報告する。参加した講演は Wendy Holloway 教授によるものであった。この講演では、女性が母親になる過程で抱える葛藤に焦点を当てたインタビュー研究が紹介された。現在のジェンダー問題の議論では、男性にも注目が集められつつある。そのため、講演終了後に私は「男性にもインタビューを行いましたか?行っているとすればどのような内容でしたか?」という質問をしたところ、「今回は紹介することができなかったが、一人の個人だけでなく家族全体に焦点を当てて研究を行っている」との返答があった。家族のなかでの役割観が親や兄弟姉妹関係とも関係があるならば、家族全体への注目は非常に重要な視点といえる。世代間で伝わるものへ注目することの重要性を認識できたことは、私の研究にとって収穫であったと言える。

学会運営について

学会の運営側に携わった経験がまだ少ないため、私にとっては学会運営方法の面で勉強になることが多かった。例えば、Registration desk と Help desk を分けて設置していた点である。登録を滞りなく済ませることができたと同時に、何か問題が発生した際にはいつでも Help desk に聞きに行くことができた。また、発表のためのデータ入力も前日に済ますことができ、発表前の時間を慌しく過ごさなくて済んだことにも好印象をもった。どのスタッフも質問に対して流暢な英語で返答してくれたことにも驚いた。博士後期課程に所属する院生として、これから学会運営補助の役割を果たしていく機会は多くなっていくと考えている。今回の経験を、これから関わるであろう学会運営の作業にも生かしていきたい。

2009年 10月 16日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 甲南女子大学人間科学部心理学科・特任講師 氏 名 大友 章司



会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳			23rd Annual Conference of the European Health Psychology Society ヨーロッパ健康心理学会年第 23 回大会							
公式ホー	-ム~	٥	ジURL	http://mozart.rad.unipi.it/psico/						
開	催	期	間	2009年	9月	23 日	~	2009年	9月	26 日
旅	行	期	間	2009年	9月	21 日	~	2009年	9月	28 日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記			Italy, Pisa, Congress Palace of Pisa ("Palazzo dei Congressi") イタリア・ピサ、ピサ会議場							
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記		Shoji Ohtomo(Konan Women's University) & Yukio Hirose (Nagoya University) 大友章司(甲南女子大学)・広瀬幸雄(名古屋大学)								
発 ※正式		題 日本	目二語訳							
補具	助 :	金	額	(内訳 大阪		00,000 -マ間の _!		賃 105,850 円の-	一部)	

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

2009 年度日本心理学会国際会議等参加旅費補助金により、2009 年 9 月 23 日から 9 月 26 日に開催された"23rd Annual Conference of the European Health Psychology Society"(ヨーロッパ健康心理学会年第 23 回大会)において、"How does habit influence an unhealthy eating behavior?"(Shoji Ohtomo & Yukio Hirose)という題目でポスター発表を行った。

本大会は主催がヨーロッパ健康心理学会であるものの、さまざまな国から多くの研究者が参加していた。また、健康行動の予測モデル、ストレスコーピング、well-being、HIV等の疾病問題への心理的な支援、感情と認知に関する神経心理学的なアプローチなど研究発表の内容も多彩であった。とりわけ、私が専門とする計画的行動理論の分野では、Armitage、Sheeran や Conner といった高名な研究者の発表に加え、当該理論を拡張した研究発表が数多くあった。私もそのいくつかの研究発表を拝見することができ、主観的規範よりも記述的規範の方が健康行動の事例では影響力が強く作用する傾向が強いなど、同じ専門分野ならではの濃密な議論を行うことができなった。したがって、当該分野の研究者にとって、ヨーロッパ健康心理学会は非常に有用な学会の1つとして勧めることができる。

私の発表は、2日目の"Predicting Health behavior"というセッションに割り当てられた。同セッションで11の研究発表あり、同じ時間帯では181の研究発表と、非常に規模が大きかった。そのためか、ポスターを掲示する場所は、部屋の壁で、中にはドアに掲示しなければいけない研究者がいた。また、ポスターを貼るためのテープは容易されておらず、会場設営については不満をもった発表者は多かったように思える。当大会は初めての学会のため、このような事態は恒例なのか、イタリアの学会独自のものなのか判別はできないが、今後発表を予定している研究者は事前に対応を準備しておく必要がある。私のセッションでは、well-being とリハビリ行動の関連といった私の専門と関係がない発表もあったが、計画的行動理論に関連した発表が自分を除き2つあり、お互いの発表について個別の変数について専門的な議論をすることができた。また、セッション内で各自5分程度の研究紹介の時間があった。その時のChairが、健康行動のモデルについていくつも論文を発表しているKokであったため、私の発表についても、「習慣化によって自己効力感が減弱する理論的裏付けとしてのどのようなことが考えられるか」など鋭い質問を受けることができた。一連の議論により今後の研究を発展させる重要な示唆を得ることができた。したがって、当学会への参加は、私にとって非常に有意義な体験をするこができた。

最後に、日本心理学会により補助を賜ったことを厚くお礼を申し上げます。一部の大学を除き、 地方の私立大学の教員には研究費がほとんどなく、国際学会に参加することが非常に困難な状況に あります。このような支援があることにより、若手の研究者が国際学会で活躍する機会が多くなっ たことについて、心から感謝を申し上げます。

2010年 2月 2日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 金沢工業大学特別研究員 氏 名 松田 幸久

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	32 nd European Conference on Visual Perception (32 回ヨーロッパ視知覚学会)					
公式ホームページ URL	http://www.ecvp2009.org/					
開 催 期 間	2009年 8月 24日 ~ 2009年 8月 28日					
旅行期間	2009年 8月 23日 ~ 2009年 8月 29日					
開 催 場 所 (国·都市·会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	University of Regensburg, Regensburg, Germany (レーゲンスバーグ大学、レーベンスバーグ、ドイツ)					
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松田幸久、吉澤達也、河原哲夫 (金沢工業大学)					
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	What is underlying facilitation effect in spatial cueing task? (空間手がかり方における促進効果に潜在するものはなにか?)					
補助 金額	100000円(内訳 航空運賃)					

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

松田は日本心理学会より国際会議等参加旅費補助をうけて、ドイツの Regensburg にて開催された 32nd European Conference on Visual Perception (ECVP) に参加し研究報告を行った。松田の研究 関心は視覚的注意である。当国際会議において Attention and visual search と題したトークセッ ションや Attention というポスターセッションが開かれていた。松田はそれらに参加し発表者と直 接議論を交わすことができ、このたびの国際会議への参加が非常に有意義なものとなった。

松田は会議4日目、ポスターセッションにて「What is underlying facilitation effect in spatial cueing task?」と題した発表を行った。以下に発表内容を記す。

Title

: What is underlying facilitation effect in spatial cueing task?

Authors

: Y Matsuda, T Yoshizawa, and T Kawahara

Abstract: Since spatial cueing method was provided by Posner (1978, 1980), that cueing method has been thought to be able to investigate the spatial property of attention. Attention that is captured and allocated at the cued position, is believed to facilitate information processing. If this is the case, the power of attentional capture would be varied as a function of reaction times (RT) in the valid condition. Our previous results in simple detection task showed significant correlation between the amount of attentional capture and RTs in the invalid condition (Matsuda & Iwasaki, 2008). These results suggested a hypothesis that the original account might be incorrect. In this research, we examined this hypothesis in discrimination task and central cueing task. The results showed same pattern of those in simple detection task. These results are not congruent with the idea what spatial cueing method facilitated the information processing of the stimulus presented at the cued location.

在席時間中に20人をこえる研究者が訪れ、それぞれの方から活発な意見を投げかけられた。刺激 の物理的特徴についての確認に始まり、促進効果における注意過程に関する本質的な質問などを受 け、自身の研究データに対する解釈が再考されるいい機会となった。そのような議論を通して、松 田らの研究の注意研究における位置付けが確認でき、今後の研究モチベーションの向上につながっ た。

最後に、このような機会を与えてくださった日本心理学会国際会議参加旅費補助金担当および関 係者の皆様に深謝いたします。

2010年2月10日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科・博士後期課程 氏 名 川上 直秋

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 11 th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (人格・社会心理学会(SPSP)第 11 回大会)
公式ホームページ URL	http://www.spspmeeting.org/
開催期間	2010年1月28日 ~ 2010年 1月30日
旅行期間	2010 年 1 月 27 日 ~ 2010 年 2 月 4 日 (航空券の確保のため、帰着日を申請より 2 日延期した)
開催場所 (国·都市·会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA, Nevada, Las Vegas, at the Riviera Hotel and Convention Center (アメリカ合衆国・ネバダ州ラスベガス・リビエラホテル会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	川上 直秋 (筑波大学大学院博士後期課程人間総合科学研究科) 吉田 富二雄 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Accumulative effects and long-term continuity of subliminal mere exposure 闘下単純接触による累積的効果とその長期持続性
補 助 金 額	100000円(内訳 往復航空券・大会参加費・宿泊費) (申請時の見積より安い航空券が確保できたため、余剰分は学会中の宿泊費の一部に充てさせていただいた)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

【活動報告】

アメリカ合衆国ラスベガスにて、The 11th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology が開催され、"Accumulative effects and long term continuity of subliminal mere exposure (閾下単純接触による累積的効果とその長期持続性)"についてのポスター発表を行った。本研究は、日々の接触の積み重ねがどのような影響を与えるか、その長期持続性の観点から実験的に検討したものである。特に、単純接触効果の文脈から、閾下呈示による無意識的な好意度への影響に着目した。

【成果】

SPSPへの参加は今回2度目であった。前回ポスター発表を行った際には、海外での発表が初めてということもあり、戸惑いの連続であった。まず、一般的なポスターの形式が日本のそれとは大きく異なることに驚いた(文章主体のポスターであった)。また、発表のスタイルも極めてフランクであり、アルコール片手に議論をしている研究者の姿が印象的であった。そして、何よりも言葉の違いに大きな壁を感じ、積極的な議論ができなかったのが非常に残念であった。

今回は以上のような反省を踏まえ、綿密な準備の上発表に臨むことができた。その結果、他国の研究者とも議論ができ有益な発表になったと感じた。中でも実験の方法論について、他の研究者から好意的な反応を得ることができた。しかしそれと同時に、今後の研究の展開についても議論となった際、自らの言葉不足ゆえなかなか思い通りのことが伝えられず残念であった。この点は、次回発表時への反省課題である。とは言え、単純接触効果や無意識過程の最前線であるアメリカにおいて、自らの研究成果を公表でき、好意的な反応を得られたことが何よりの収穫であり、今後の研究への大きな動機づけとなった。さらに、自らの発表以外にもシンポジウムなどにも積極的に参加し、世界における研究の最前線を知ることができた。以上のように、全体を通して有意義かつ満足度の高い学会参加であった。

【付記】

この度は、補助金と言う形で海外発表を援助していただきましたこと、心より感謝申し上げます。 おかげで、自らの研究成果の発表に留まらず、更なる研究への意欲を高めるきっかけとなりました。 最後に、申請時での見積りにおける航空機代よりも、割安な航空機券を確保することができたた め、その余剰分は学会期間中の宿泊費の一部として充てさせていただきましたこと、ご報告申し上 げます。

2010 年 2 月 15 日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科・大学院生 氏 名 浅野 良輔

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 11th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology 第 11 回パーソナリティ・社会心理学会年次大会				
公式ホームページ URL	http://www.spspmeeting.org/				
開催期間	2010 年 1 月 28 日 ~ 2010 年 1 月 30 日				
旅行期間	2010年1月27日~2010年2月1日				
開 催 場 所 (国·都市·会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Riviera Hotel and Convention Center, Las Vegas, The United States of America アメリカ合衆国,ラスベガス,リビエラホテル・コンベンションセンター				
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	浅野 良輔 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)				
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Relational efficacy, shared emotions, and relationship stability in romantic relationships 恋愛関係における関係効力性が共有された感情と関係安定性に及ぼす影響				
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 名古屋―ラスベガスの航空券代, 大会参加費)				

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

この度は、申請者の発表に対し、国際会議等参加旅費補助金をいただきまして、心より感謝申し上げます。以下、当該学会での活動内容、ならびにその成果を報告させていただきます。

【活動内容】

11th annual SPSP conference において、ポスター発表を行ってまいりました。申請者の発表日時は1月28日(木)の19:00~20:30でした (Poster Session A60)。アメリカは申請者が専門とする親密な関係についての研究の本場であり、そこでのディスカッションは研究を発展させる上で必要不可欠です。自身の発表後は、他の研究者によるシンポジウムやポスター発表に参加して、最新の知見や情報を得たり質疑応答を行ったりしてきました。

【成果】

1. 自身の研究発表

本学会では、恋愛カップル 107 組を対象とした縦断研究から、関係効力性が二者の感情体験を介して 6ヶ月後の関係安定性 (関係が続いているか) に及ぼす影響について発表しました。関係効力性とは、自分たちの関係を脅かす問題の予防と解決に向けた、二者双方の様々な資源の協調的・統合的な活用に関する、二者間で共有された期待として、申請者が提唱した構成概念です。これにより、従来の"いかなる"パーソナリティや認知スタイルを持つ個人がよい関係を築けるのかという視点から (個人レベル)、"いかにして"二者が協力し合いながらよい関係を築いていけるのか (ペアレベル)、という視点での研究が可能となります。

本研究の独創性は、間主観的な構成概念である関係効力性を提唱し、それをマルチレベル構造 方程式モデリングという新しい分析手法によって実証可能にした点にあります。他の研究者も、この点については強い関心を示したと見受けられ、その着眼点を高く賞賛されました。同時に、関係効力性と従来の構成概念との比較といった、理論的側面についての質疑応答を行ってきました。また、相互独立主義的な文化といわれている北アメリカと、相互協調主義的な文化といわれている日本との間で、恋愛カップルにおける関係効力性の強さやその効果が異なる可能性など、新たな研究の方向性を示唆するコメントをいただくことができました。

2. 他の研究発表

本学会では、社会的排斥や社会的脅威をキーワードとする発表が多くなされていました。その中でも、社会的排斥が自己制御機能に及ぼす影響についてのシンポジウムにおいて、摂食行動や薬物使用といった健康関連行動を扱った発表が非常に興味深く、シンポジウム後には発表者と短い時間ながらもディスカッションをする機会を得ました。また、媒介変数や調整変数を扱ったモデルの新しい検証方法、従来の横断調査や2~3波のパネル調査の限界など、方法論にまつわるシンポジウムは自身の研究に応用する上でも非常に示唆的でした。

2010年3月29日 (西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院 人間総合科学研究科・大学院生 氏 名 三 浦 絵 美

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 11 th Annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology 第 11 回 SPSP 大会
公式ホームページ URL	http://www.spsp.org/
開催期間	2010年1月27日 ~ 2010年1月30日
旅行期間	2010年 1月 26日 ~ 2010年 2月 3日 (航空券手配の都合で、申請時の旅行期間から変更させていただきました)
開催場所 (国·都市·会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The United State of America・Las Vegas・The Riviera Hotel (アメリカ合衆国・ラスベガス・リヴィエラホテル)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	三浦絵美・吉田富二雄 筑波大学大学院人間総合科学研究科
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Narcissism and causal attribution and affection to past events 自己愛傾向と過去の出来事への原因帰属および感情との関連性
補助金額	100,000 円 (内訳 航空券が申請時よりも安価で手配できたため、大会参加費および宿泊費に充当させていただきました)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、 その旨を該当事項欄に明記して下さい。

このたび、国際会議等参加旅費補助を受け、2010年1月27日から29日にかけて開催された、The 11th Annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology に参加いたしましたので、ご報告させていただきます。

ポスター発表は学会期間2日目の午後だった。前回参加したときよりも、直接コメントをもらう機会が多かった。発表の時間帯が幸いしてか、ポスターの前で足を止めてくれる人が多く、滅多に意見交換ができない海外の研究者からコメントやアドバイスをもらうことが出来た。「自己愛」と直接関連しない領域で研究している研究者がほとんどで、自己愛における誇大性・過敏性の側面、特に過敏性に興味を示す人が多かった。もともと自己愛研究で古くから議論されてきた2側面だが、日本独特の相互協調を重んじる文化背景と併せて説明すると"Very interesting"と反応が返ってきた。自己愛の過敏性研究が海外であまり盛んではないのは、やはり文化的な要因が大きいのかと感じた。また、自己愛と関連をみると今後の研究の広がりに繋がるであろう変数についての助言をいくつかいただいた。今回のアドバイスやコメントをいかして今後の研究に繋げていきたい。

そして、昨年に引き続き、今回も「自己愛」に関するシンポジウムが開催されていた。前回の大会ではインターネット上の行動(ソーシャル・ネットワーキング・サイトに自身の顔写真を載せる行動など)に関する発表が行われていたが、今回はリアリティー番組(Reality television)への参加に関する研究発表だった。発表者も取り掛かったばかりの研究らしく、フロアからさまざまな意見を引き出しており、発表者とフロアが活発に議論し盛り上がりを見せていた。また、シンポジウムで特に印象深かったのが、海外研究者の発表スタイルだ。大勢の聴衆の前で研究発表を行う際、自分の研究の意義・重要性をいかに伝えるか、また得られた結果から何が言えるかをアピールする必要があるが、海外研究者はそれらのアピール能力が非常に高いと感じた。パワーポイントのスライドに限っていえば、文字が小さかったり、かなり長い文章で書かれていたり、決してレイアウトとして完成度が高かったわけではないが、口頭での間の取り方や抑揚をうまく使って、自分の研究のセールスポイントを効果的に伝えていた。今後の、自分自身の研究発表のときに、是非活用したいと感じた。以下に、アブストラクトを掲載する。

Narcissism can be classified into oblivious narcissism and hyper vigilant narcissism (Gabbard, 1994). Roddewalt (2001) shows that Oblivious narcissist employs social and cognitive strategies to maintenance their ideal self image. One of the strategies is self-serving bias using causal attribution (Rhodewalt & Morf, 1995, 1998). In present study, targeting both oblivious narcissism and hyper vigilant narcissism, the relation between causal attribution and affection on positive (and negative) experiences were examined. And strategy for self-evaluation maintenance was discussed. In study 1, a measurement of narcissistic personality was developed based on two types of narcissism. A factor analysis of the measurement of narcissistic personality revealed the following six significant factors: "self-glorification," "sensitiveness to evaluation," "the need for attention and admiration," "jealousy," "self-absorption," and "the tendency to have fantasies about the ideal self." In study 2, subjects recalled positive and negative experiences, and then they completed causal attribution and affection about each event. We conducted a multiple regression predicting narcissism factors with attribution and affection. As a result, in the positive experience, "self-glorification" and "the need for attention and admiration", as an oblivious narcissism, promote inner-attribution and positive affections. In the negative experience, "self glorification"," jealousy" and "the tendency to have fantasies about the ideal self", as an oblivious narcissism, promote external-attribution and negative "Sensitiveness to evaluation", as a hyper vigilant narcissism, promotes inner attribution and negative affection, inferiority feeling and jealous. Hyper vigilant narcissism doesn't promote aggressive strategies to maintenance their ideal self-image, but they show jealous towards others.